

「北海道遺産」提案書

遺産の名称：ニニウ地区一帯

所在地：勇払郡占冠村字ニニウ

概要

勇払郡占冠村字ニニウは環峯千尺の底にあり、「日本のチベット」あるいは「陸の孤島の中の孤島」と称される、北海道でも恐らく最も特異な集落である。かつて30戸以上の農家が生活していたが、現在までに全戸離農した。そこには原始の自然ではなく、明らかに人間の手の加わった独特の景観が形成されている。

この美しき廃村が乱開発により失われるのを避けるため、占冠村では早くから総合的な計画を持ち、「ニニウ自然の国」として整備を進めてきた。ニニウは殖民区画により明治期に開拓された正統な山村であること、道内屈指の奥地にあること、無住地となった後も村により整備管理されてきたことなど、他の部落とは異なる特質を有しているといえる。

選定の理由

- 1) ニニウ地区が北海道内陸地方開拓の歴史の縮図となっていること
- 2) 奥地ゆえ昭和40年代まで無電灯、冬季には保存食という特殊な生活様式が残存していたこと
- 3) 占冠村により整備管理されてきたゆえ廃屋、離農跡、廃校などが美しく保たれていること
- 4) 多数の文献により過去の生活史の詳細な記録があること
- 5) 「人と自然のかかわり」を体感でき、教育の場としてふさわしいこと
- 6) 高速道路の建設が進められおり、ニニウの環境と調和した道路計画とするため、ニニウの貴重さを早急に調査する必要があること(古代遺跡などよりもむしろ重要と認識されたい)
- 7) 四方を取り囲む山々が、公園(エコミュージアム)としてのニニウに自然の境界を与えてくれること
- 8) 無住地であるゆえ活用・観光化しやすいこと

住所

氏名

年齢・性別・職業

電話番号

メールアドレス

次ページ以降に資料を添付いたします。

なおホームページ <http://kkyo14-ue.eng.hokudai.ac.jp/onitoge/ninewhome.htm>

にて、北海道遺産への認定を念頭におきまして詳細なニニウの紹介を行っています。

ニニウ年表

1907(明治 41)	ニニウ殖民区画設定
1911(明治 44)	私立教育所開校(のちのニニウ小学校)
1929(昭和 4)	占冠市街-ニニウ間馬車道(旧道)開通
1960(昭和 35)	占冠市街-ニニウ間林道開通(現道道夕張新得線)
1966(昭和 41)	石勝線建設工事に伴い， 電化，ランプの暮らしから解放 ニニウ-占冠間冬季除雪開始，乾物・保存食の生活から解放
1975(昭和 50)	新入小学校・中学校廃校
1976(昭和 51)	学校跡地を林間学校として開設
1981(昭和 56)	国鉄石勝線開業
1984(昭和 59)	ニニウ自然の国サイクリングターミナル開業
同年	ニニウの人びとをテーマとしたドラマ「鬼峠」がSTVで放送される
1986(昭和 61)	ニニウキャンプ場開設

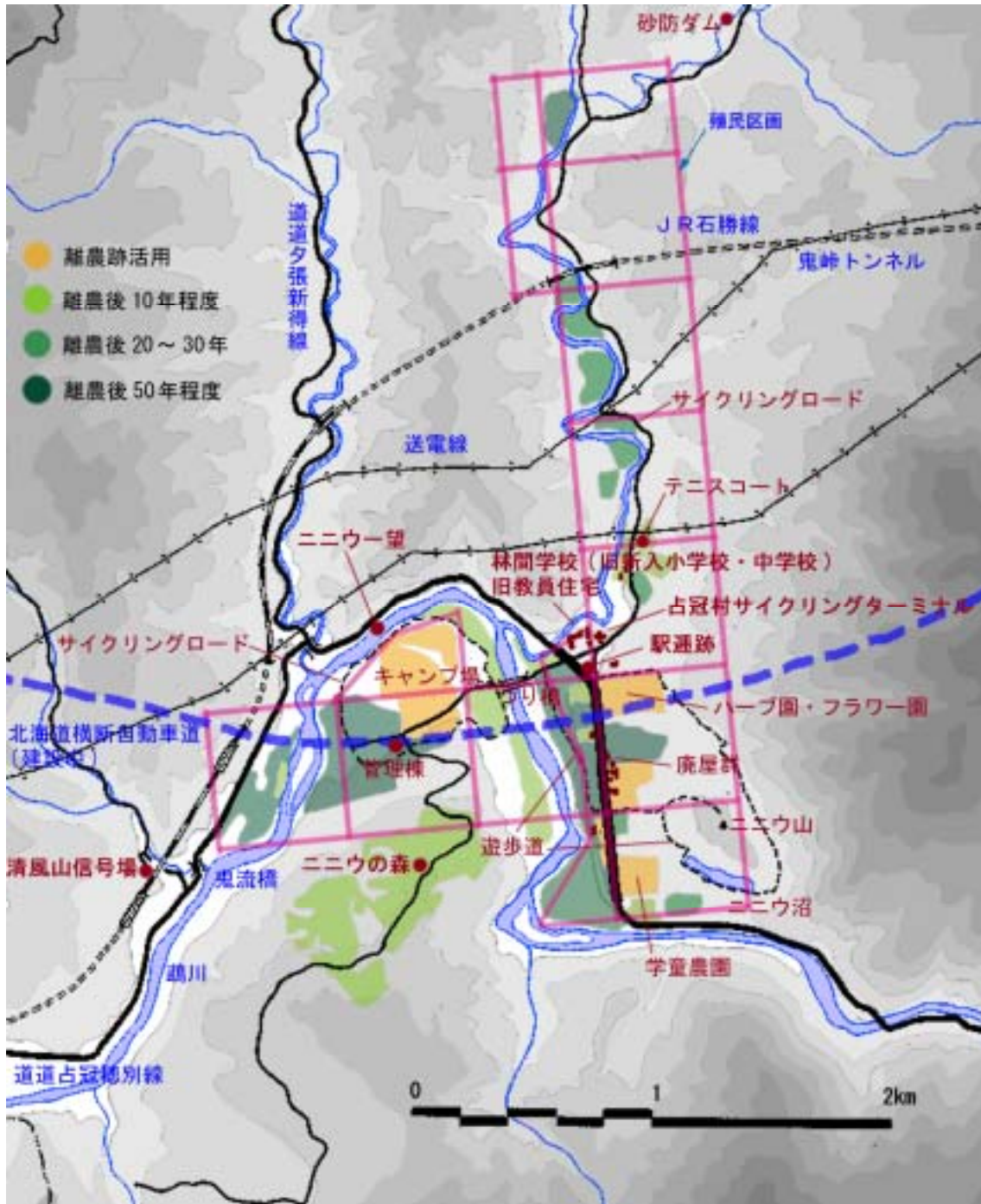
ニニウの遺産

自然遺産	蛭，鹿，蝶，清流鷓川，ニニウ山，ニニウの森，天の川(星空)，etc.
文化遺産	廃屋，駅跡，つり橋，鬼峠旧道，新入小・中学校(廃校)，馬頭観音，etc.
産業遺産	JR 石勝線，北海道横断自動車道(建設中)，送電線，殖民区画，ニニウ沼，農場跡，牧場跡，etc.

ニニウ自然の国既存施設

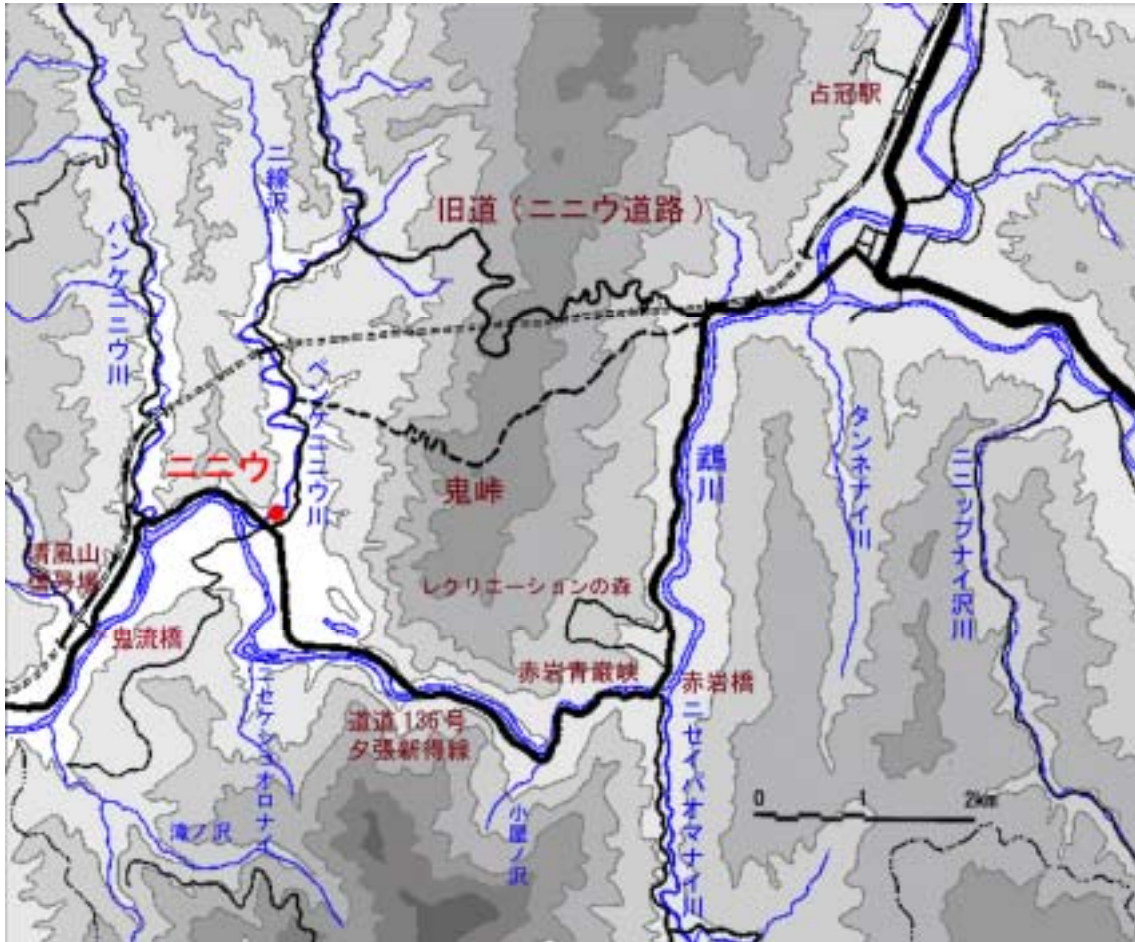
サイクリングターミナル(80人収容)	自転車(BNX バギー車など 7種 50台)
遊歩道(3.4km)	多目的運動広場(テニスコート 2面 芝生広場)
体験農園(4.2ha)	キャンプ場(500人収容) 管理棟
バンガロー(6棟)	林間学校(200人収容) 炊事場(2カ所)
サイクリングロード(2.5km)	ニニウの森

ニニウ詳細図



ピンク色のグリッドは明治 41 年設定の殖民区画
 離農跡は旧地形図，現地調査による推定
 北海道横断自動車道の線形は現地調査による推定

ニニウ～占冠地図



自然遺産

「写真集」とあるのは”Village Japan : the four seasons of Shimukappu / photographs by Nicholas DeVore III. - New York : Weatherhill , 1993”より転載したもの。それ以外は私が撮影。



ニニウの森 キャンプ場の奥の小高い丘。旧牧草地。1998年から1999年にかけて道の補助を受け、村により植樹された。360度のパノラマで、「陸の孤島」を実感できる。



清流鶴川 道道136号ニニウ入口より望む。かつて木材の流送も盛んだった。(写真集)

鹿 ニニウの遊歩道を歩くとよく鹿に出会う。夜には蛍の乱舞。蝶やクワガタも多い。(写真集)



赤岩青巖峽 ニニウと占冠中央間にあり、ニニウを陸の孤島たらしめた渓谷。かつてニニウの人々を苦しめた渓谷もいまはロッククライミング、ラフティングなどあえて過酷な自然に挑戦する人たちが集う場となっている。(写真集)

文化遺産



旧新入小学校・中学校 1975年廃校。翌年より林間学校として使用されている。

つり橋 ニニウキャンプ場の入口。もともとは生活道路で鵜川に2本のつり橋がかかっていた。



占冠村サイクリングターミナル 1984年開設。環境設計/下村・矢尾板都市建築研究所により設計された名建築で、今も新鮮な印象を受ける。(占冠村観光パンフレットより転載)



・ 廃屋 ニニウ自然の国の要素として組み込まれてきたため、保存状態は良好。電気もなかった昭和30年代の生活を今に伝える貴重な遺産。他に4軒分残存。(下の2枚は写真集より転載)



産業遺産 - 交通・通信



ペンケニウの谷を通過する JR 石勝線 真下をサイクリングロードが通っており，辺境の地でありながら現代生活が見え隠れする。(写真集)



清風山信号場 当初ニニウ停車場として計画されたが，石勝線開業時には残存農家少なく信号場に。北海道遺産となればここを駅にして観光化を。



鬼流橋 ニニウには鬼峠・鬼流橋と鬼がつく地名が2つもあり，厳しい開拓時代をしのばせる。



殖民区画 ほとんど未舗装の道道に突然現れる約1kmの舗装直線区間。「二線」にあたる。



北海道横断自動車道，測量杭 1999 年末より道東自動車道の測量が開始された。キャンプ場外周のサイクリングロードを横切っている。

送電線 かつて電気も道路もない陸の孤島だったニニウに，今は鉄道・高速道路・高圧送電線といった北海道の大幹線がニニウを通る皮肉。

産業遺産 - 農業

ニニウにおける自然は原始の自然ではなく、ほとんどが一度人間の手が加わった自然である。それが再び原始の自然に帰るまでの様々な段階の自然が見られ、教育の場としてふさわしい。



体験農園を手伝う農民たち(写真集)



体験農園，収穫(写真集)



水田の跡に咲く水芭蕉 蛙は殖民区画に沿っている。



離農跡に咲く野の花 ニニウでは原始の自然に帰るまでの様々な段階の離農跡が見られる。(写真集)



ニニウ沼(仙人沼) もとの農業用ため池か。仙人は「蛇食い仙人」のエピソードに由来するものと思われる(写真集)



キャンプ場 もとはここも農地だった。昼間は清流鶴川で水遊び。夜は満天の星空に蛍の乱舞，山間にこだまする夜行列車の通過音が印象的。

ニニウに関する文献

ニニウについては以下のように多くの文献で紹介されている。山村の小さな集落としては異例のことであるが、このような形で過去の生活史が記録されていることが遺産としての価値を高めている。

- 『占冠村史』：占冠村役場，1963

故・岸本翠月がほとんど一人で編纂された村史である。岸本は中富良野町に在住していた作家であり郷土史研究者である。実際に歩いて書くという信念のもと、ニニウの生活の様子も詳しく描かれており、ニニウの独自性のひとつはこの村史の第三部「郷土別六十年史」により詳細な過去の記録が残っているということにある。ニニウに隣接する穂別町福山は穂別町史を見ても単なる事務的な記録しか残っていないことに際立った対比をみることができる。

- 『近代僻地教育の研究』：榎本守恵著，同成社，1990

「第4章占冠ニニウの実態と歴史 『占冠村ニニウの教育計画に関する研究』の一前提」として、教育に関する文献でありながらニニウの歴史や生活実態の紹介に大部分のページを割いている。ここに、北海道研究の第一人者であった榎本氏にとってもニニウが特筆に価する地区であったことがわかる。

- 『しむかっぶの水害』

村史同様、岸本翠月により編纂されている。昭和37年の大洪水の記録を中心にまとめられたものである。

- Village Japan : the four seasons of Shimukappu / photographs by Nicholas DeVore III. - New York : Weatherhill , 1993

開基90周年記念の写真集。1993年時点のニニウの記録写真集ともなっている。

- 『日本の湖沼と溪谷 1，摩周・サロマ湖と日高の溪谷』：第一アートセンター編，ぎょうせい，1987

「秘められた峡谷のおもかげ ニニウ溪谷赤岩青巖峡」の章があり、北大名誉教授・橋本誠二が著している。溪谷の本でありながら本文の主題はニニウの生活史に置かれている。

- 『占冠村開基90年誌』：占冠村開基90周年記念事業協賛会，1992

付録として「開拓入植者の記録」がついており、明治・大正期と昭和期のニニウ殖民区画への入地者が地図に記載されている。こういう記録があること自体珍しいが、無住地と化してもなおこのような資料を作成するところに、占冠村のニニウへの思い入れが感じられる。

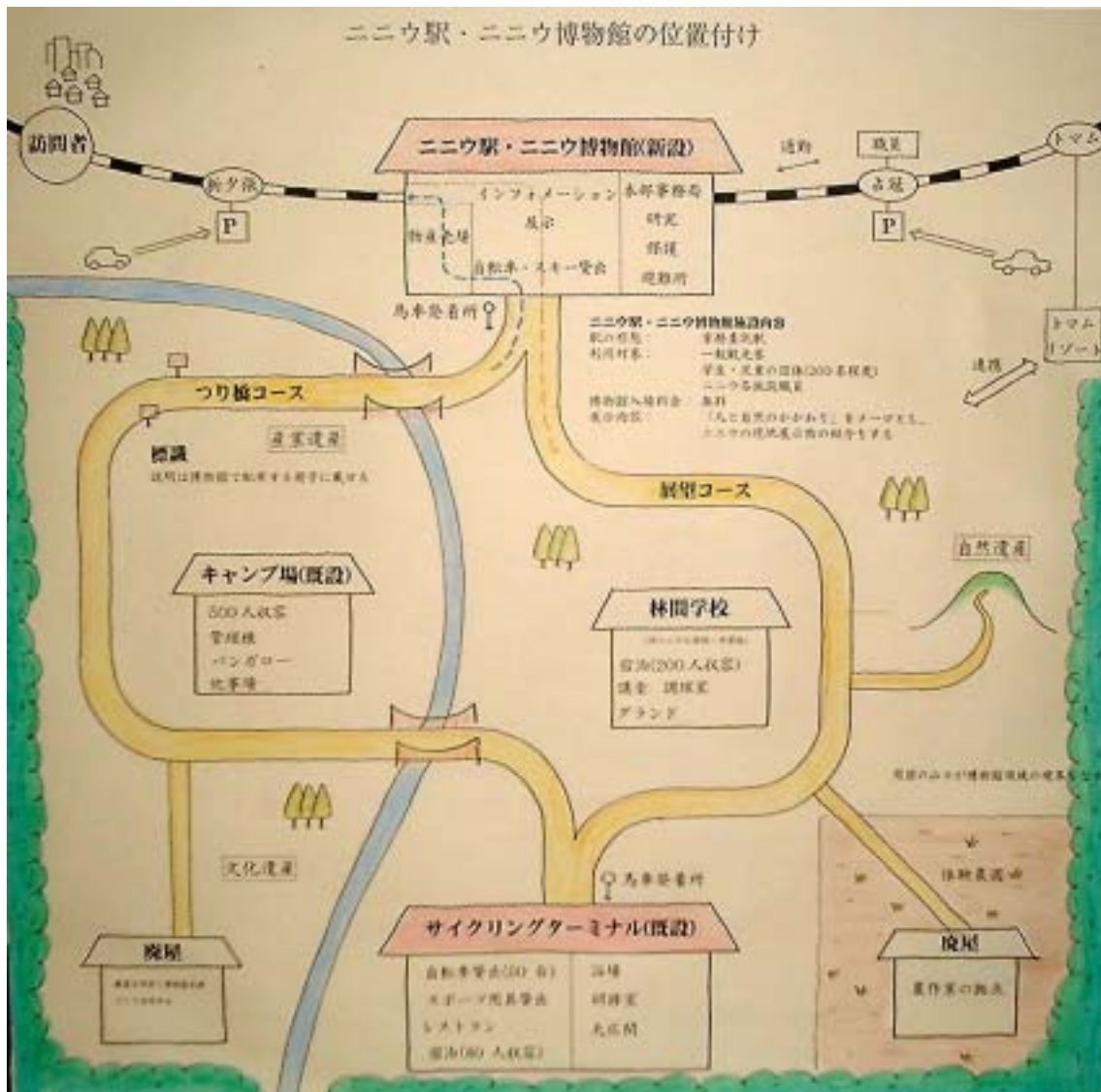
- 『占冠ガイドブック』：占冠村・占冠村観光協会，1987

ニニウ自然の国計画や鬼峠，鬼流橋のエピソードが記載されている。

- 『石勝線建設工事誌』：日本鉄道建設公団札幌支社，1982

石勝線の建設工事はニニウに大きな影響を及ぼした。また、工事関係者にとってもニニウは大変なところだったようである。その辺のエピソードが紹介されている。

ニニウ活用の一例 ニニウ・エコ・ミュージアム



上は私がまったく個人的に考案したニニウの活用計画で、ホームページ
 “ニニウへ急げ” http://kkyo14-ue.eng.hokudai.ac.jp/oni_toge/ninewhome.htm
 にて仮想博物館「ニニウ博物館」を設置している。

ここでは「エコミュージアム」の思想に基づき、ニニウ地区全域を「人と自然のかかわりを体感する博物館」とらえている。その中核博物館としてニニウ駅(清風山信号場)内にニニウ博物館を設置した。

なお、上の計画ではアクセス確保のために、清風山信号場を旅客駅としてニニウ駅としているが、高速道路の建設も決定されたため、高速道路の休憩施設からニニウへのアクセスを可能にするなど、道路との関わりも検討する必要がある。

ニニウを活用するには地元の占冠村の意向を第一に進めていくべきで、「都会からの押し付け」ではなく「地方からの発信」という形で「遺産掘り起こし」を行っていくことが重要だと考える。